

緑区民の

戦時体験記録集（第三集）

1996年

第八回戦争体験を語り継ぐ集い・資料

目次

発行にむけて

— (2)

恐かった空襲・・・・・・布目鐘之

— (3)

岩間典夫（莫宝清）のこと・・・・・・橋詰四郎

— (9)

戦時の女学生生活・・・・・・鈴木定江

— (19)

（無題）・・・・・・嶋田紀子

— (22)

苦しい時代でした・・・・・・コンスタンティン・マチヨセック

— (24)

〈特別転載〉

回想・・・・・・渡辺正彦

— (28)

発行にむけて

「緑区民の戦時体験記録集」も、今年で第3集になった。今こそ記録を残しておかないと間に合わなくなる、と実行委員会でその必要性が語られ、苦労を重ねてここまですべて続けることができた。快く執筆を引き受けてくださった体験者の皆さんには、実行委員一同感謝に絶えない。戦争の悲惨な体験を子どもたちのために伝え、平和の大切さを知ってほしいという、心からの願いが込められており、心に迫るような内容ばかりだった。ワープロ編集に携わった者は、その重さに耐え切れず、涙をふきながらの作業だったと思う。

なかなかしんどい作業を通して創り上げているこの記録集が、家庭の中での平和教育のためにどうか役立つようにと願っている。

第8回 「戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会



日本がアメリカやイギリスなどの国と戦争を始めたのは、もう五〇年以上前になります。始めのうちは日本軍が優勢でした。航空母艦から発進した飛行機はまるで忍者のように、太平洋からインド洋にかけて大活躍して戦果をあげました。

しかし昭和一七年六月ミッドウエー島の攻撃に失敗して、航空母艦四隻が沈められてしまいました。これから日本軍は負け戦になり、アメリカ軍は昭和一九年六月サイパン島に上陸し、ここに大きな飛行場をつくり、当時世界最大の爆撃機B-29の基地となり、日本全土が爆撃できるようになりました。

その大きさは幅四三・一m、長さ三〇・一八m、重さ三三・八t、爆弾を積んだとき五四・四t、速さ五五〇km/時、一二・七mmの機関銃一〇丁を備え、八〇〇〇m以上の高さで五二〇〇kmも飛び、一二人の兵士が乗っていました。

名古屋へ初めて飛んできたのは、今ドーム球場をつくっている所に、三菱発動機工場があったので爆撃したのをはじめ、大編隊できたのは一六回で、一番沢山きたのは昭和二〇年五月一四日の四四〇機です。このとき名古屋城が焼けてしまいました。

私達が戦争中に日本軍の飛行機を見たのは、せいぜい二〇〜三〇機でしたがアメリカのはその一〇倍もの飛行機を飛ばして、日本全国の都市を爆撃してゆきました。

皆さんは阪神地震をテレビで見たでしょう。市内のあちこちで大きな煙と焰をあげ、テレビにその焼跡が映りました。空襲で焼けた名古屋市内は、名古屋駅から市役所・東山の方まで全部焼けてしまって、残っていたのはわずかのビルと電柱、風呂屋の煙突ぐらいでした。

皆さんの見たことのある火事場は、焼け焦げた柱や屋根が残っていたと思いますが、空襲で燃えた跡は何も残りません。赤茶色になって粉々になった瓦がそのまま地面に落ちていました。初めのうちの空襲は大きな工場を狙っていましたが、じゅうたん爆撃と言って市内の端から端まで焼夷弾を落して家々を焼いていきました。それは都市の上にじゅうたんを敷きつめたようだったのでそう言ったのだと思います。

なかにはまわりから先に焼いて、住民達の逃場をなくしておいて、最後に中の方を焼くという方法をとったものもあります。昭和二〇年三月一〇日の東京大空襲がそうです。このときは一〇万人の人が死んだと聞いています。これが夜間無差別爆撃の第一号だったのです。

名古屋でも一月三日午後初めて無差別爆撃があり、三月一日には夜間無差別爆撃があり、続いて一九日、二四日にもありました。二四日には鳴海にも焼夷弾が落ちました。当時の鳴海はまだ田舎で焼夷弾が落ちると思ってもいなかったでしょう。

焼夷弾は六角形の太さ一〇cm、長さ五〇cmぐらいの筒にゴム、油、火薬などを

混ぜたようなものをつめ、火をふいた油が飛散り建物を燃やしてゆきました。地面まで落ちてしまえば、それほど怖くありませんでしたが、木造の家の二階や天井裏に油がこびりついていると火事になります。

夜間の無差別爆撃は南の方から一機ずつ侵入して焼夷弾を落してゆきます。高さは一〇〇〇mぐらいだったでしょう。突然探照灯がB―二九をとらえ、ずっと照らし続けますが、まるで竹竿でとどくほどの高さです。しかし高射砲をうつ気配がありません。恐らくあまり低すぎて撃った途端、弾が破裂して危なかったからでしょう。敵機もそれを知っていて低空で侵入してくるようです。

敵機は次から次へと数かぎりなく侵入し、やがて探照灯もとらえなくなり、市内のあちこちから大きな火の手があがり、その明りでB―二九の機影がよく見えるようになりました。

焼夷弾は三〇本ぐらいが束になっていて、落とされるとすぐばらになります。その束が一度に沢山落ち、ばらばらになるとき火花がでて、まるで花火をさかまにしたように飛び散ります。近くに落ちたときは大雨のように、空全体がザーと音をたて落ちてきます。そんなときは防空壕に入ったり、物かげにかくれたりします。するとまわりで急にヒュー、プスツと言うすごい音がして、油の燃える匂いと火花が飛散ります。直ぐ近くに落ちたのです。家に落ちたときは先ず天井を見ます。天井さえ

燃えていなかったら、皆で消火にかかれます。

敵機はだんだん図々しくなり飛行機の横や下から機関銃をうってきます。それが途中で火をふいて飛んできますが、効果があるかどうか、いやがらせのようでした。空襲が終わって朝になると、焼けてしまった家のキナ臭い匂いが、あたりに立ちこめ顔をすすで真っ黒にした人達が、自分の家から何か残っていないかと、焼跡を掘っているの見て気の毒だなあと思いました。また焼夷弾やそれを束ねていた、バンドや鉄板がそこらじゅうに落ちていて、よく当たらなかったものだとぞっとしました。

不発に終わった焼夷爆弾が道端に転がっていました。これは半分火薬をつめ、半分は油とゴムをつめたもので、爆弾とそっくりの大きさで破壊力があります。これが爆発した跡は直径二、三mの穴があき、大量の油をまき散らすので、とても人力では消えません。また二五〇kg爆弾も混ぜて落したので消火したり、避難している人達の近くや防空壕に落ちて亡くなった人もいます。空襲は夜中の一時頃から始まって二、三時間続くので寝不足になり、防空壕のなかでは、子供が怯え赤ちゃんが泣きます。すると大人達がどなります。赤ちゃんの泣き声が敵機に聞えるわけでもないのに、皆イライラして怒るのです。

三月十一日の空襲だけでも亡くなった人は五一九人、三月十九日は八二六人、五月一七日は五〇五人になります。戦争が始まってから敗戦までの名古屋市内で亡くなっ

た人は全部で七八五八人にもなりました。

しかし本当の戦争の怖さはこんなことではありません。広島や長崎に落された原子爆弾の被害や、沖縄の地上戦はもっと悲惨でした。たった一発の爆弾で広島では当時二〇万人、長崎でも一〇万人の人が一瞬のうちに死んで、町は破壊されてしまいました。そして今でも原子爆弾による後遺症で沢山の人が苦しんでいます。

昭和二〇年四月には敵の軍艦など一三一七隻、飛行機一七七一機、四五万の大軍が沖縄本島の沖に現れました。日本人の誰も見たこともない大軍です。まるで沖縄の海が軍艦や輸送船で真っ黒になったことでしょう。

その軍艦から撃つ弾の数は、B―二九の落す爆弾とはくらべようもないくらい大量の砲弾、爆弾です。消防車が何台も並んで一斉に水をかけたように、砲弾が飛び爆弾が落ちてきたのです。

それからもっと大切なことは、日本人が命を粗末にしたことです。サイパン島ではアメリカ軍が市民と日本軍を分離して戦うことを考えていたのに、多くの市民が子供を抱いて崖から海へ飛び込んで死んでいったのです。捕虜になっては恥ずかしいと、

また愛知県の豊川にあった海軍の工場では、死んでも職場を離れてはいけないと、空襲になっても退避させず八月七日一〇時過ぎ、わずか二六分のあいだに二五四四人が亡くなりました。B―二九、一二四機に攻撃され八一三の爆弾を落されたのです。

工場から退避してをれば死ななくてもよかったのに。こう言う教育を受けた戦前の人達はかわいそうでしたね。

ですから私は今でも思っています。どうしてもっと早く戦争を止めて降伏しなかったかと。

原子爆弾を落される前に。いやサイパン島が占領されたときに。

(平成八年六月二一日)

中国名 莫宝清（マオパウチン）

山石間曲六太のこゝと

（元中国黒龍江省遜克県政治協商副主席）

（日本では副知事か議会の副議長に当る）

一カ月前の六月十三日、岩間夫婦と長男夫婦、二人の孫の六人が日本に永住するため帰ってきました。今日は岩間を中心にして、私の知る限りをお伝えしますので、国益とは戦争とはを、ご家族で話し合って下されば嬉しいですよ。

岩間は昭和三年十月三日生（六十七才）です。学校の先生の勧めで、十五才の昭和十八年、日本の食料を確保するため、満州へ農業をしに行く「青少年義勇軍」に入ります。この時代の男の子は、国の為に少年航空兵・少年戦車兵・海兵団・陸軍幼年学校・少年義勇軍に応募するのが、天皇陛下の為になると教育されていました。

／若い命の僕達は／土の日本の前衛だ／炎と燃える感激に／鋏を担って来たからは／きつと拓（ひら）くぞ／大満州。

この青少年義勇軍の歌に送られて、日本を出発する時は『国の為の開拓戦士』『昭和の屯田兵』と出征兵士と同じように、村中の人に万歳、万歳と見送られ故郷の駅を後にしました。

明治の初め、失業武士団に鋏と銃を持たせ、アイヌの土地を国益の為に開拓したよ

うに、義勇軍は関東軍の保護下で、自らも銃を持って他国の土地を開拓し、匪賊の襲撃にも応戦しました。（匪賊には後で触れます）

開拓地に着いた岩間達の住まいは、家の中に床がなく、地べたに藁が敷いてあり、これが寝床だったのです。唯一の楽しみは食べることだけですが、大豆が主力の混ぜ飯で、育ち盛りの少年達は、国にだまされたと直感しても、どうすることも出来ません。幹部と呼ぶ指導員は、昼から酒を飲み、夜は町の売春宿へ行きます。そのお金は、少年達に食べさせる食料を横流しして作り出し、中には日本の家族へ送金する幹部もいたと言われます。当然栄養失調者が多数で、死ぬ人も出ました。少年達は考え、幹部に牛が狼に殺されたと言って、十数頭殺して食べてしまったり。養鶏場の暖房をわざと加熱し、火事にして千羽近い丸焼けの鶏を食べたりします。

この頃、日本では義勇軍で成長し、結婚適齢期の青年の花嫁を、お国の為と市町村役場が音頭をとって義勇軍を集めたように「来れ！大陸の花嫁！」と美辞麗句を並べ募集し送り出します。

空腹のため牛や鶏を殺したことが幹部に判り、袋叩きにされますが、食事は少しも改善されず、少年達を「お前らは内地からの捨て子だ」と言う幹部もいて、遂に少年達は幹部を襲撃し反省を求めますが、岩間は首謀者として北満国境の「朝水訓練所」

に入れられます。ここは訓練所と関東軍第六国境守備隊朝水陣地があるだけの、文字通り鳥も通わぬ辺境で、野地坊主だらけの湿地帯で、前は黒龍江、後ろは興安嶺で、柵がなくても到底逃げ出せる土地ではなかったのです。

実はこの朝水陣地に橋詰が配属され、私達は全員玉砕して、ソ連軍を三時間釘付けにして南下させない任務でした。この三時間は、朝水より後方にある南満州の軍隊が戦闘準備を完了する時間でした。訓練は日夜、人間爆弾で戦車を爆破する練習で、私との同年兵には一人も長男がおりませんでした。

この同年兵の中に（熊谷・旧姓加藤）は朝水訓練所にいた義勇軍出身でした。彼は軍隊より義勇軍の方が辛かったと体験をよく話してくれました。義勇軍も軍隊制度で、先輩が後輩をいじめるので、辛抱出来なくなった加藤等は共謀して、先輩を小銃で攻撃し双方で銃撃戦になり、遂に軍隊が出動し鎮圧された経験の持主です。

横着な少年に対し、幹部は「朝水訓練所」へ行かせると脅し文句で、統制をとっていた朝水に入れられた経緯を話してくれました。朝水訓練所は義勇軍の「少年刑務所」だと言っていました。

八月九日ソ連軍が攻撃してきて、私達は朝水訓練所の全員を陣地に保護しました。この中に「岩間十七才」がいたのです。私達は義勇軍を「シヨウハイ」中国語で子ども」と呼び弾薬運搬などに使いました。八月六日広島に原爆が落とされたことを知っ

ているのは、命令受領した私と、命令書を私から受け取った佐久間中隊長の二人だけで、他の者はシベリアから生還してから知りました。

三時間死守せよが、八月十五日の敗戦も知らず、二十二日の武装解除までソ連軍と戦闘を繰り返しました。負けていないので降伏は出来ないと、私は武装解除される前に陣地から離脱し、多くの戦友や岩間達を含む義勇軍とも別れ、運命を別にします。

ガダルカナルで敗戦を体験した、私の尊敬する相馬中尉は、敗戦時の模様を次ぎのように話してくれました。アメリカ軍に徹底的にやられていたので、十万の将兵は誰一人と戦争を続ける気力がなく、すんなり降伏したと。

私は逃げている時、ソ連軍と戦闘をしていない部隊に巡り合います。この兵隊達はソ連兵を殺していない、私もその一人になりました。シベリアでは開拓団にいた、青森か福島出身の「村田正。三十五・六才」に出合います。彼はシベリアで死にました。名前は正（タダシ）ですが東北訛で自分の名をタダスと発音していた（彼の村は小作農家が多く、満州に国益に沿って、第二の村づくり「開拓団村開村」に参加。タダスは故郷では地主の土地を耕し、収穫した米は地主に出し、酒も買えぬ貧しさで、米を隠して「どぶろく」を造り、娘は年頃になると売られていったと話していました。村中で引越した開拓地でもタダスは「どぶろく」を造り、「どぶろく」を通して

中国人の農民と親しくなっています。この開拓村は収穫が終わるとよく匪賊に襲われたとも話していました。開拓団の歌に／不逞の輩（やから）の不意討ちに／妻も銃取り応戦す／とのフレーズがある通です。これを日本では「匪賊」「馬賊」と呼んでいました。

ある日、親しい中国人農民が開拓村へ来て、タダスに今夜俺の家で祝いがあるから「どぶろく」を一升持って遊びに来てくれと頼むので出掛けます。家には祝いはなく、中国人の話しを聞きながら二人で「どぶろく」を飲み交わし、タダスは話しに同情し、泣き、酔いつぶれて寝てしまいます。開拓村が襲撃されたことも知らずに。

日本から開拓団が来るからと、一方的に奥地の未開地に定住させられたと言うのです。先祖から俺らの土地だ、収穫は俺らの物だ、だから収穫が済むと貰いにくるとうのです。未開地の開墾は多難で、まだ収穫は出来ず、俺は開拓団の動静を探る役で残っていると云うのです。その夜、開拓団は前住民に襲撃され、多数の死者が出ます。タダスは強引な日本の政策に嫌気がさし、開拓団を離れ新京で働き、攻めて来たソ連軍の「男狩り」でシベリアへ連れてこられたのです。シベリアでは薬がなく献血が薬代で、私は四百CCを湯原（岡山県）に献血し、湯原も帰国できました。結婚した私は妻と献血数を競い、妻の献血数三十一回に脱帽しています。

一方、岩間は陣地で軍人と一緒に降伏し、シベリアへ送られます。その冬シベリア

では大勢の日本人が、飢えと重労働と寒さと疫病で死にます。ガダルカナルの十万の将兵も戦争が終り助かり、日本本土も空襲がなくなり助かり、アウシュヴィッツのユダヤ人も戦争が終り助かります。しかしシベリアでは、戦争が終って平和になってから、六万から七万の日本人が殺されているのです。日本の国益のために。

岩間のシベリアでの強制労働は、彼の証言によると、ソ連は日本人が病気になること、これとこれは外へ出せと言うので、二人で外へ出す仕事をさせられたと言っています。外、そこは氷点下三十度の冷凍人間製造所です。毎日トラック一台に日本人の死体を積み上げたと言っています。そして、これは僕のいた処だけだ！。他を合わせる。何処の誰か名前も年も判らない人ばかりだった。しかも岩間が居たことは、朝水陣地の兵隊も居たのです。そう私の戦友たちです。

翌昭和二十一年三月、ソ連はシベリアでは使い者にならない病弱者と、十八才に満たない者を、結氷した黒龍江を歩かせ満州へ追放します。この追放の旅でも大勢が死んだと証言しています。この中に私の戦友、児玉（滋賀県・黒河事件を生き抜き帰国後死亡）菅井（名古屋市・黒河事件で銃殺）上村（豊橋市）が含まれていたのです。

※黒河事件Ⅱ昭和二十一年六月二十一日、シベリアから追放された者の内、約六百数十名が八路軍を殺し、南満州へ向け脱走。半数は捕まり殺された事件。

追放された岩間は、北安（ペイアン）で食物探しをしていると、日本語で八路軍兵士に話しかけられます「仕事をしていますか？」と。仕事もなく、食べ物もないと答えると、食堂へ連れられ腹一杯食べよと進められ、水ギョウザを腹一杯たべます。この時の感想を岩間は、十五才で義勇軍に入るため故郷を出てから、この時まで腹一杯食べた記憶はない、いつも空腹で泣いていたと言っていました。

食べさせてくれるならと、八路軍の兵士に志願します。一カ月は腹一杯食べて休養の毎日で、十八才の若い体力は回復していきます。昭和二十一年五月、八路軍は百台の馬車に物資を満載し、十五名の警備兵に守られ出発しますが、途中オロチョンの攻撃に合い、物資もろとも岩間もオロチョンに捕まり、今年の六月帰国するまで、オロチョン日本人としての生活が始まり、少数民族オロチョンで、一人も政治の表舞台に出た者がなかった中で、岩間がオロチョンとして県の副主席になっていくのです。

※オロチョン族 中国黒龍江省付近を中心に住む約三千人程度の狩猟民族。民族学的にはポチャ族・アイヌと同系と謂われている。移動生活だから農耕の習慣も、井戸も掘らない。家は西部劇に出てくるアメリカインディアンの天幕に酷似している。現在は岩間の努力で定住。井戸も掘り、家も中国人と同じ。中国は子ども一人政策だが、少数民族は除外され多子家族でもある。

戦友、上村喜代蔵（豊橋市・昭和二十八年十月帰国・平成三年死亡）の証言で岩間

がオロチョンに捕まった頃の、黒龍江省の情勢を知ってもらいたい。

シベリアから翌年三月栄養失調で黒河に追放され、八路軍の将校に連れられ、戦闘した陣地付近で寝泊りし、戦死して一年近くも放置された死体を埋めたり、隠した日本軍の武器弾薬を発掘して八路軍に渡す作業を六月頃までした。八路軍は我々を日本へ送ろうとしないので仲間と相談し、この将校を殺し、全員政府軍に寝返る、隊長は「李」という人。六月二十一日早朝、多数の日本人が逃げてきて、八路軍を殺して逃げてきた、君達も逃げろと言うので「李」隊長と逃げる。七月頃「李」隊長は日本人を連れ八路軍に降投。次ぎの隊長は「馬」この隊長、大のアヘン中毒で困り、九月頃オロチョンに頼み殺してもらう。これが縁でオロチョンと四年間生活する。以下略。

このように、敗戦一年後の黒龍江省は政情の混乱期で、政府軍・八路軍が元日本兵をそれぞれ仲間にし交戦、これに日本の降伏拒否軍やオロチョンも加わる四正の小競合いをしていたのです。四者に共通しているのは、相手の武器や物資を手に入れることだけです。帰国した上村から「岩間オロチョンで生存」が伝わりましたが、国交のない国では確認も出来ず、岩間が故郷に手紙を出せたのは昭和四十九年でした。

狩猟民族オロチョンは山中や平原を馬に跨り、一発で獲物を仕留めて一人前と認められます。昭和二十三年、岩間二十才の時、大猪を仕留めオロチョンより一人前と認め

められ、オロチョン語も覚え、莫宝清の名前を付けて貰う。昭和二十四年、八路軍側の革命政府が樹立し、中国共産党の少数民族定住対策で、岩間はオロチョンに井戸掘りも教え、土壁の家も六十戸ほど建てる。岩間の隠くされていた才能が次第に花開く時期が迫ってくるのである。

二十二才、青年岩間は、オロチョン長老の勧めで、莫金花と結婚する。時に昭和二十五年五月であった。

狩猟民族を定住民族にさせる努力は並大抵ではない、定住し農業だけでは生活の向上は不可能で、失敗すると元の狩猟生活に逆戻りは必定である。義勇軍で習った農業を教え、狩猟で小興安嶺を駆け回っている時発見した、石灰石・真珠石・メノウの鉱脈を政府へ進言し、オロチョン族の地場産業へとする他、養鶏、鹿を撃ち殺して角を漢方薬業者に売っていたのを、鹿を捕らえ「鹿牧場」で飼育する他、果樹園など定住の功績を次ぎ次ぎ行なうのである。

昭和四十二年、江青ら四人組が巻き起こす恐怖の文化大革命が始まり、岩間は知識人らと共に苦難の道へ追い込まれるのである、貧しい下層の労働者や農民が革命の指導者であるが文革のメインで、工業も農業も生産力が破壊された中国の悲劇であった。詳しくは、ビデオシヨップで『ラストエンペラー』『大地の子』を借りて見て下さい、文化大革命の非人間的行為が正しく表現されています。

この文化大革命は十年近く暴れ回り、岩間と家族は耐えに耐え抜くのであります。俺は中国と日本の平和の懸け橋になりたい。落葉帰根Ⅱ落した葉はその根に帰る、岩間の信念の言葉です。帰国をする機会は度々ありましたが、その都度「落葉帰根」と残留を選びました。東洋の鬼子を殺さず、受け入れてくれた人への恩返しと。オロチョンの定住と豊かな生活ができるまでと、オロチョン語、中国語の読み書きも覚え、副主席を定年の六十才まで頑張ったとき、党も人民も岩間に頭を下げ、三年の定年延長を求め、「落ちた葉はその根に帰る」と引き受けます。俺は日本人だから「長」にはなれないと言って、六十三才まで副主席の激務に耐えたのです。

岩間典夫、六十七才。オロチョンの家族を五人連れて、永住するため日本に帰ってきました。今度は私達が暖かく受け入れる側と願っています。

昭和十九年春、あこがれの市立第二高女に入学した。白い上衿のセーラー、白線が裾に一本入ったスカート。でもこの制服も長くは着ていられず、二学期頃から学徒動員で、熱田区船方にあった愛知航空機で兵器増産に携わる。国防色（黄土色）の上下を支給され、左腕には勤労学徒の腕章と、黒字に梅・桜を黄色の糸で縫い取りをした、今ならさしずつめワッペンの校章をつけ、防空頭巾と救急袋を肩から交又させ工場へいった。救急袋の中身は非常食として、生のさつまいもを細切りにし乾燥して煎ったものや炒り豆（大豆）など。

支那事変、大東亜戦争（太平洋戦争）と幼い時から戦争の中を育ってきた私たちは、何の疑いもなく、お国のために、戦地の兵隊さんのために、銃後は私達の手で、と一途に頑張ってきた。しかし同じ年の十二月七日の東海地方を襲った大地震で工場内の地面はコンクリートが割れて、作業不能な状態に陥った。止むをえず作業場を学校に移し作業を続けた。いわゆる学校工場である。

日増しに戦況は悪化し、空襲は晝夜を問わず頻繁にあり、夜など防空壕に避難する回数が多いので、寝巻に着替えなどせず、そのままで過ごすようになる。油脂焼夷弾の攻撃を受けた時など、あちこちで炎がメラメラと上がり、母も私

も祖母も全員、火叩きを持って消火に走り回った。

三月の大空襲の時だった。夜空が火の手で真赤に染まり、その中をB29（アメリカの爆撃機）が低空をゆうゆうと飛んで行く。この光景は一生私の眼から消え去ることはない。この時学校も焼けた。ひょっとしたら学校はたすかっているかもしれない、と翌日友と二人で学校まで、市電の軌道上を歩いていった。校舎は跡形もなく焼けおちていた。

学校が焼失して私は、石川県へ疎開した。級友たちは、鷹来の工廠へと配属先が変わり、親元を離れての寮生活をした。

疎開先は石川県内の母方の従兄弟の家の新築の納屋で、土間には筵をしいて家族五人が暮らす。ひどい住家だが、空襲がなく、ぐっすり眠れるだけでもありがたかった。着いた翌日から借りた畑でじゃがいもの作付けをした。自分達の食糧は自分達で作らなければ誰も売ってはいくれないからだ。丁度春先で山へ入れば、わらび、ぜんまい、のびるなど山菜が採れ、どれ程胃袋をみたしてくれたか。

学校は疎開生として羽咋の高女に転入した。家から一里の道を歩き七尾線の高松駅から汽車で羽咋まで、そして学校へ。学校では半日が勉強、半日は農作業などだった。疎開生は東京や大阪からがほとんどで、名古屋からは二人だけ

だった。名古屋は工場動員が他地区よりは早かったようで、それだけ勉強は遅れていて、授業についていけず悔しかった。又、何かにつけて疎開生はと先生に怒鳴られたりもした。

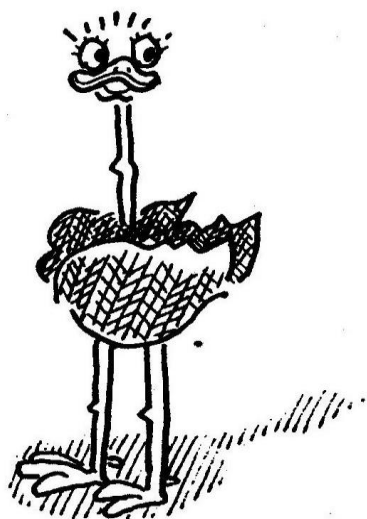
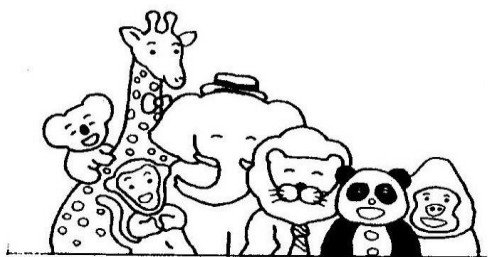
その頃母は、石川と名古屋を何度も往復し両方の暮らしを守るのに懸命だった。あの昭和二十年六月七日の熱田の上空襲の時も、名古屋の家にいたが、幸いにも難をのがれ、父も防衛招集で白鳥橋の辺りを自転車で行中だったが無事だった。

戦争が終わって名古屋に戻り、母校へ復学出来たのは二十年の十一月頃だったか。学校は二年生の二学期になっていた。

以後、戦後の苦しい日々を送ることになるが、どんなにお腹が空いても、着る物がなく継ぎはぎでも、家族が揃って食卓を囲み、ゆっくり眠ることが出来るのが無上の喜びだった。

平和のありがたさを、この時ほど痛切に感じたことは後にも先にもない。

いま振り返って悲しく思うのは、そんな忘れるはずもない戦争、戦後の体験の記憶が年とともに自分の中で薄れていくことだ。もっと辛い思い出が山程あったはずなのに、それが想い出せない。



昭和二十年、私は七才、鳴海小学校二年生だった。母の手編みのセーター、もんぺで下駄をはき、帯芯で作ったカバンを肩からかけて学校へ通っていた。食物は、すいとん、かぼちゃ、さつまいも、麦飯、それに母の作るイーストパン、少しすっぱい味の鉄鍋で焼くパンで、学校へ持っていくと珍しがられた。

小学校の隣の砦は、桜の林で、その下を畑にして町内ごとに区切って、芋や大豆を作っていた。燃料の炭も薪も買えず、伝治山や今の鳴子あたりの山へ木を切りに出かけ、リヤカーに積んで帰った。生木をたくので家中煙だらけで、天井はすすで真黒になった。

衣食とも全く足りていなかったが、爆風で飛んできた石で屋根に大きな穴が二つあっただけで家は無事、家族に欠けるものもなく、それだけで幸せな日々を過ごしていた。

大人にとって苦しかった戦後のくらしも、子供の私には、なつかしい思い出になっている。薪取りは、水筒とふかし芋を持ち、リヤカーに乗せてもらってハイキング気分だったし、砦の畑では桜の木のヤニを集めたり、当時、米軍に接收されていた鳴海球場（今の自動車学校）の米軍の野球の応援に来たブラスバンドの演奏や楽器が日光にきらめくのを木に登って眺め驚嘆したものだ。

今、思うと、学校は私の生活の中で、ほんの少しの部分でしかなかった。



苦しい時代でした

コンスタンティン・マチヨセック

【明治三十八年（一九〇五）三月ポーランド生に。二十五才の昭和五年（一九三〇）十月、キリスト教の神父として来日。三十五才から四十三才の昭和十五年（二十三年）まで、緑区鳴海町矢切に居住す。現、知多市長浦町に居住。九十一才。】

※この文章は昭和五十年（一九七五）四月発行「鳴海教会献堂式文」より抜粋しました。転載にあたり文意をそこなわないにして、小学生高学年向に理解できるように勉強しました。尚「注」は参考用に付記。

文責は橋詰です。

雪の多い金沢でよく風邪を引いたので、暖かい鳴海へ行きなさいと、昭和十五年に鳴海へきました。当時の鳴海は大変な田舎で、人情の細やかな暖かい土地でした。

戦争に使うので、食べ物も品物もどんどん少なくなり、国民は「欲しがりません勝つまでは」と言って、つらく苦しい時代になっていきました。

鳴海の上空はB29（注1）のコースになっていたため、毎日空襲（注2）でした。炊事やお風呂に使う焚木もなく、今池まで家屋疎開（注3）で壊した家の材木を、ボロ服をまとい、靴でなく素足にぞうりでリヤカーを引いて貰いにいきました。外国

人はスパイと思われていたので、何回も刑事さんから、「そのスパイさんは誰ですか。」と、取り調べを受けました。

日本と同盟国、ドイツ人のパスポートをもっていたので清酒とタバコは、日本人より多い特別配給（注4）をうけることが制度になっていました。私はそれを全部相原村「現、鳴海町相原」の親切的な農家で、サツマイモや野菜と物々交換して、天使園の子どもの飢えを満たすために役立てていました。

私の住んでいた矢切の教会は約八百坪「一坪＝三・三平方メートル」と広かったので草花を止め、全部畑にして、サツマイモ、南瓜、ジャガイモや色々な野菜を作り、肉は豚、うさぎ、にわとりを飼育して、山羊を飼って乳を採り、自給自足の生活でした。

朝からイモを食べ、昼も食べるものはイモしかなく、夜もイモだけで、生涯食べるであろうイモはこの時に全部食べてしまいましたので、今はもう食べません。

空襲の度に窓ガラスを全部はずしてから、防空壕（注5）に逃げ込みました。鳴海にも爆弾が落とされ、たくさんの人が死にました。教会の近くの防空壕が爆弾の直撃を受け、中の人が全部死にました。爆弾で怪我をした重傷者を、タンクで運ばれるのを見ました。その中の一人が天使園のシスターに見えたので、爆弾の中を終油の秘跡（注6）をしようと思い、急いで走って後を追いかけてました。その人は男の人で、シスターではありませんでした。私の見間違えでした。女の人もモンペやズボンで全部男のような恰好で生活をしていた時代でした。

ヨーロッパでは、イタリアもドイツも降伏して戦争は終わっていましたが、日本だけは「鬼畜米英」「進め一億火の玉だ」と、B29に竹やりやバケツで戦争を続けていました。沖縄がアメリカに占領され、この次ぎアメリカ軍は日本本土に上陸して攻めてくるというので、この付近の外国宣教師は全員、多治見の修道院へ日本軍により集められ監視され、日本の敗戦は多治見で迎えました。

この期間は、日本人にも、外国人の私にも、つらく苦しい時代でしたが、鳴海教会の周りの人々との心の暖かい交流も深めることも出来ました。

戦後は、日本人と一緒に戦争のない平和を喜びながら、戦争で傷ついた心や物の復興に務めました。心の暖かい鳴海の人達から信者も増えてきて、聖堂建設を考える時がきました。しかし、神様は私に鳴海を離れて、岡崎に教会を開きなさいと命じ、私は、日本の一番苦しかった時に住んでいた、鳴海をさようならしました。

★注1 B29 アメリカ軍が造った世界一の爆撃機「超空の要塞」と呼ばれ、四屯半の爆弾を積み、高度一万五以上で五千二百機飛べる。日本軍の高射砲も飛行機もとどかぬ高さをゆうゆうと飛んで、日本を爆撃した飛行機。

★注2 空襲 爆撃機や戦闘機など空から攻めてくること。名古屋の初空襲は昭和十七年（一九四二）四月十八日。

★注3 家屋疎開 駅や工場の周囲の家を取り払い、空襲から駅や工場を守るために空地や広場にしてしまう方法。今池の近くに兵器を造る陸軍工廠があった。学童疎開は子どもを空襲から守るため、都会から田舎へ避難させること。

注4 配給 今のように何でも自由に好きなだけ買えなかった。戦争に使う物しか作らず、酒もタバコも一カ月ごとに量数が決められていた。農家は農作物を全部政府に出さず隠してして、食べ物のない人の品物と、食べ物とを内緒で交換した。都会の人は着ている物と交換するので「筍生活」という言葉が生れた。

注5 防空壕 空襲から助かるために、庭や家の床下に自分で穴を掘り、上に土を置いた穴倉。今のシェルターと比べると、紙細工のような弱さだった。

注6 終油 キリスト教カトリックの教えの一つ、死期の近い人にする祈り。戦争ではたくさんの方が死ぬので、外国では従軍司祭という坊さんが、軍隊と一緒に行動していて「終油」をした。

外国では「従軍司祭」を軍隊に付け、死ぬ人のために祈ったが、日本では「従軍慰安婦」を付け今も国際問題になっている。

※戦争中日本にいた外国人宣教師の話によると、憲兵や警察官に「キリストと天皇陛下とどちらが偉いかと聞かれ」キリストと答えると拷問されるので、「おそれおおくて、くらべることはできません」と言って、巧妙に言い逃れた逸話が残されています。この神父さまも、戦争中の話しはしたがありません、よほど辛かったのでしょう。

一、健民修練所

(1) 影向寺

昭和十九年の夏、体格の良くない者を集めて、約一ヶ月の合宿による体育訓練が、豊浜の影向寺で実施されました。私もやせっぽっちの為、この訓練に参加を命ぜられました。仲間が工場で汗を流している時代に、一ヶ月も現場を離れるのは、一寸後めたい気持がありました。「この非常に、これでいいのかな。」四年生と五年生の合同合宿でした。以下はその中の事どもです。

(2) 日程

起床、座禅、朝食、勉強、昼食休憩、体育訓練、体操・掃除・行軍・水泳・夕食自由時間・就寝等だったと思います

(3) 食中毒

ある日行軍の途中で、柿の木を見つけました。色は青いのですが、盆柿と言ってももう食べられる柿との事でしたので、私をはじめ幾人かが、この柿をとって食べました。その日の夕食は蟹が出ました。もちろん全部きれいに食べました。ところがその晩、十時過ぎから猛烈な腹痛、文字通りの七転八倒、お手伝いの娘さんに、一晩中、腹をさすってもらいました。健康な時ならそんな事はとても考えられない事です。あの時ばかりは、恥も外聞もなく、一晩中看病してもらって本当に有難く思いました。私の他には二人、たぶん五年生だったと思います。

天罰^{てんばつ}顔面とはこの事で、昔からの食べ合せ「蟹と柿」をまさに地で行く出来事でした。以後蟹は見ただけで、蕁麻疹が出るようになりました。

(4) 天井

戦争中のことから、食糧はもちろん配給です。従って育ち盛りの我々は、常に腹ペコです。

そんな時、お寺の近所の家で、闇の天井を食べさせることを、誰かが聞いて来たのです。少々気は咎めましたが、早速夕食後の自由時間に出掛けました。天井一杯が三十銭が五十銭だったと思います。よく通って食べましたが、その時の美味しさは今でも忘れていません。

(5) ストライキ

引率の先生が五年生をヒイキにしたとか何とか、原因はもう忘れましたが、ある日の朝食後、日課をほったらかしにして、四年生全員が海岸の方へ出掛けました。ストライキです。今考えると、あの戦争中の厳しい時代に、よくまあと思うのですが、自由主義的な校風が幸しか、お咎めもなくストライキは終わりました。

(6) クラゲ

昔から「盆過ぎは海に入るな」とは聞いていましたが、八月十五日過ぎに、防波堤の内側で泳いでいたら突然「チカ、チカ、ビリ、ビリ」。びっくりして陸へ上って見たら、腕や腹は文字通りミミズ腫れ、犯人はクラゲでした。やっぱり盆過ぎは海に入るのは、ダメだったようです。

(7) 溺れる

水泳訓練の時、五年生の横江直郎君が溺れた。てっきり、ふざけていると思ったら本当だった。本人は大分水を飲み、青い顔をして、ぐったりしていた。後に豊明市内の小学校で、一緒に勤務する事になって、世の中は狭いと思った。

(8) 篠島めぐり

夏の終り頃、行軍で篠島へ行った。豊浜の崖を通ると、昔の貝の化石が崖の断面に露出していた。どの辺りから船に乗ったかは忘れたが、暑い日中に島内を一周して帰った。記憶に残っているのは、帝^{みかど}の井？とか呼ばれる古い井戸があった事だけです。

二 学徒動員時代

(1) 試 運 転

日本車両ではC-11型の蒸気機関車を造っていた。どういう理由かは忘れたが、ある日完成車の試運転に同乗させてもらい、岡崎まで往復した。しかし何分にも機関車一輛のみの試運転だから乗る場所もなく、熱田→岡崎間をデッキにぶら下がっていた。現在ではとても考えられないが、若さのせいで、無茶な事をしたものだと思う。

(2) 白 虹

これは前回の一〇〇号に掲載してもらったので、ダブルことになるが、現在でも一生に一度の得難い体験だと思うので、敢えてもう一度。昭和二十年五月十四日の名古屋空襲で、名古屋城が炎上し、黒煙が空を覆った時、太陽がうすぼんやりと南の空高くあった丁度その時、ぼんやりと浮かぶ太陽を、串刺しにするような形で、白い虹が掛かるのを見た。「白虹が日貫くとき国が滅ぶ」という中国の故事を想い出し、いよいよ日本が亡びる時が来たかと、心中暗澹たる気持になった。現在でもあの時の光景は、よく思い出す。

(3) 爆 撃

昭和二十年六月九日、空襲警報が出た。その頃は空襲警報になると、逃げ出すのが当たり前になっていた。神宮前から名鉄電車に乗り一目散に逃げ出した。鳴海駅に電車が到着すると駅員が「空襲警報が解除になりました」と連絡していたので、折返し神宮前へ戻った。ところが神宮前駅に着いた途端、ドカンドカンと爆弾の落ちる音、ビククリして駅前の水が溜った防空壕へ飛び込んで、目と耳を押さえた。ドカン・ドカンと爆弾が落ちる度毎に、ズシン・ズシンと腹に響き防空壕が大きく揺れる。いよいよここで死ぬのか、と覚悟したが幸いケガもなく土埃で汚れただけで、空襲警報が解除になった。

防空壕から出ると「愛知時計がやられたらしい」との話で早速見に行った。鉄筋コンクリート製の白鳥橋の真中に、大穴があき爆撃で亡くなった人が電車通りの両側に、ずらりと並べられている。また堀川は爆弾で飛ばされた人で埋まっていた。電線には爆風で飛ばされた手、足などがひっかかっており、正にこの世の地獄であった。その日は食べ物がノドを通らなかった。

(4) すいとん

日本車両では、昼に給食があり嬉しかった。然し来る日も来る日も塩味のすいとんばかり。でも空腹の私はうまいと思って、毎日有難く食べていた。

(5) 地 震

敗戦前に二度大きな地震があった（敗戦後もよくあった）

① 東南海地震

昭和十九年十二月七日の午後二時頃、突然ドーン！と来た。丁度蒸気機関車の動輪等が、たくさん積んである場所だったので、早く逃げ出そうとするのだが、地面の揺れが激しい為、立っていることも出来ない。結局四つん這いで工場の外まで出た。やっとのことで近くのコンクリート製のゴミ置き場にたどり着き、壁にすがって立ち上り周囲を見廻した時、隣の砲兵工廠のレンガ造りの煙突が、真二つに折れるところだった。停電で工場はストップ、また電車も不通の為、家まで歩いたが、途中二階建ての家が一階部分が潰れて平家になっている家が多かった。翌日の新聞には、被害軽微と出ていただけで、どの位の被害だったかは、その時は全く分らなかった。

② 三河地震

昭和二十年一月十三日の未明、地震があった。この前の地震で懲っていたので早速外へ出たが、寒中の夜明け頃の事とて、寒くて震えていた。前の地震で傾いていた家が、倒れているのを見た。

三代 用 教 員 （後に初等科准訓導→助教諭）

度々の空襲で日本車両まで通うのも大変だった頃、村瀬君のすすめで、田舎（現在の豊明市）の小学校の代用教員になった。しかし勉強を教える時間よりも、田舎の事とて草刈りや竹槍訓練の方が多かった。独り者なのでよく宿題を頼まれた。どうせ家で寝るのも、学校で寝るのも大した変わりはないが、ノミが多かったのには閉口した。

その頃の体育の時間は、上半身ハダカだったので、刺青ならぬノミに噛まれた跡だらけの体で、体操をしていた。

四 敗戦

敗戦の報は夏休み中だったが、学校へ集合して聞いた。よく聞き取れなかったが、『堪え難きを堪え…』の辺りで、敗戦と分ったが複雑な心境だった。校長の指示で書類を燃やしたり戦中のレコードを割って穴に埋めたりした。後年、なつメロが盛んになった頃、レコードを埋めたのは、もったいない事をしたなと思った。

五 素人演芸会

敗戦になった年から、秋の収穫時になると、各部落で素人演芸会が開かれ、のど自慢やレコード舞踊があり、夜遅くまで賑わった。

ある晩宿直だったが、同僚にさそわれて宿直をサボり、一緒に見に行った。しかしやっぱり気になるので、一時間後くらいに帰ると、宿直室の入り口に校長のスリッパがあり、一瞬青くなった。恐る恐る宿直室に入ると、先輩が高軒で寝ていた。ヤレヤレだった。

六 家城辰丙先生

戦後、用事があって愛中を尋ねた。丁度、家代先生が居られ、いろいろと話に花が咲いた。帰りがけに『映画でも見に行こう』と誘われ、先生に奢ってもらって映画館に入った。（題名内容は全く覚えていない）後年、家代先生が早世されたのを聞き、この事は忘れ得ぬ思い出となった。

七 最後に、私が思い出す戦前、戦中の歌の替唄です…。キット皆さんにも、ご記憶が…。

① 紀元二千六百年

元 唄 金鶏輝く日本の 栄えある光身に受けて

今こそ祝えこの朝日 紀元は二千六百年

ああ一億の胸はなる

替 唄 金鶏輝く十五銭 栄えある光三十銭

鷗翼上って五十銭 みんなで九十五銭

ああ一円で釣五銭

② 伊達男 （題名は違いかも知れませんがエノケンが唄ってました）

元 唄 俺は村中で一番 モボと言われた男

うぬ惚れのぼせて得意顔 東京は銀座へと来た

替 唄 俺は村中で一番 バカだと言われた男

どんな訳だか知らないが みんながもっぱら言うです

何しろ尋常の六年 念には念を入れて

自慢じゃ無いが十二年 途端に兵隊検査

その代り何でも出来る 手品に声色に物真似

芝居にダンスに綱渡り おまけに童謡ハトポップ

いろいろ望みがでかい ゲーリークーバーにチャップリン

丹下左膳に国定忠治 ディアナダービンになりたい

ああそれなのに僕を 皆がもっぱら言うです

自惚れのぼせた馬鹿な奴 おまけに心臓がでかい

緑区民の戦時体験記録集（第三集）

― 第六回戦争体験を語り継ぐ集い・資料 ―

編集責任者：第八回戦争体験を語り継ぐ集い
実行委員会

印刷、発行：名古屋市緑社会教育センター

発行年月日：一九九六年七月一三日

